

講義ノート「教育社会学」

藤 田 和 也

本稿は、本学社会学部の学部教育への導入科目の一つ「社会研究の世界」の一九九八年度講義のうち、筆者の担当した部分「教育社会学」の報告である。周知のように、この科目は三年前のカリキュラム改革で新たに設けられた講義の一つであり、社会学部の一年生を対象に学部の専門科目の勉学への誘い^{いざな}として開かれている半期講義である。講義題目が示すように、文字どおり「社会を研究する」本学部の学問研究にはどのような分野があるかを紹介し、それぞれの分野へ誘う内容を扱う。そのため、学部教育科目全体を構成している一三科目群からそれぞれ担当者が一人ずつ出講し、毎週入れ代わり立ち替わり異なるテーマで講義がなされる。

(1) 講義ノート「教育社会学」

この報告は、今年度のこの講義の最終講義日七月二二

日に筆者が担当した「教育社会学」の講義の模様である。教育社会学が講義のしんがりを務めることになったのは何も深いわけではない。筆者がこの講義の今年度のコーディネートであった関係で、他の担当者の日取り調整の必要から最後に回ったことがその理由である。

講義の報告に入る前に、筆者がこの稿をしたためる気になった、やや弁解じみた執筆動機について触れておくことにしたい。

自分が「教育社会学とは何か」などと講じる任ではないことを十分に自覚しながら、何の因果か(じつは、三年前になされた教官組織の改組による巡り合わせという側面があり、その意味では大学改革の余波というべきか)筆者が学生に向けて教育社会学の何たるかについて

講義をする羽目になった。しかも、講義といっても先に紹介したように一回きりの立ち会い勝負のような講義である。わずか九〇分という時間の中で教育社会学の全体を見渡し、その核心を伝えることは筆者にとって至難のわざどころか、とても無謀なはなしである。とはいえ、教育社会学講座の一員に迎えられた以上、それなりの任を果たさねばという多少持ち合わせている義務感を支えに担当を引き受けることにした。

そんな危なげな講義の内容を恥ずかしげもなくこのよ
うな紙面で活字にするのは、長年この講座の充実のため
に尽力してこられた藤岡先生に、後続の者がどのような
認識のもとにこの講座を継承しようとしているのかその
一端を(まさに講座の端に居る者として)ご報告し、ご
批判・ご助言をいただこうと考えたからである。講座で
藤岡先生とご一緒させていだいたのは僅か二年であっ
たが、その二年間で学んだいわば講義レポートのつもり
で書くことにしたというのが真相である。

まずは筆者の講義ノートより、講義の概要を報告しよ
う。

講義時間の九〇分を次のように配分することにした。

オリエンテーション

一〇分

この半期の講義全体のレポート提出について

1 教育社会学とは(基礎編)

四〇分

(1) 狭義の教育社会学

(2) 広義の教育社会学(「教育と社会」学)

2 教育現実への「教育と社会」学的アプローチ

(応用編)

四〇分

「学級崩壊」現象を「教育と社会」学的にどう探求
するか

(1) 録画「NHKスペシャル『学級崩壊』」の冒頭

一五分の視聴とグループ討論

(2) 討論結果の交流とまとめ

1 教育社会学とは

「1 教育社会学とは」では、この講座の名称である
教育社会学は、従来の伝統的な教育社会学の枠を越えた
視野と方法をもっていることを説明するために、教育社
会学に狭義と広義があり、この講座は後者の広義の教育

社会学を標榜していることを説明することにした。説明の内容は概ね次のとおりである。

(1) 狭義の教育社会学

教育社会学を極力短く定義すれば、「教育事象の社会的考察と研究」ということができる。「教育事象」とは教育という営為を社会的事象としてとらえることから、教育という社会的営みや個人的行為を社会事象としてとらえて、それを社会学的手法で考察し研究することである。ちなみに、教育事象の心理学的側面をとらえるのは教育心理学であり、教育事象の教授・学習過程をとらえるのが教授学や教育方法学である。

ところで、社会学には、一方に個人間や集団間の相互作用を説明しようとする集団社会学的研究があり、他方に個人をとりまく社会・文化の意味や作用を説明しようとする文化社会学的研究がある。たとえば、前者には都市社会学、農村社会学、家族社会学などといった、あるまとまりをもった集団を形成する社会構成体を対象にする研究分野があり、後者の例としては、法社会学、政治社会学、教育社会学、スポーツ社会学、知識社会学、医療社会学、等々といった文化領域を対象にした研究分野

があげられる。

この社会学の研究分野の二分法に従って教育社会学の対象とする教育事象を整理すると、集団過程における教育事象としての「社会的教育事象」と文化過程における教育事象としての「文化的教育事象」の二つに整理できる。前者を対象にした研究には、家庭教育・学校教育・社会教育・企業内教育などの制度、組織、人間関係（個人と集団、集団と集団の関係）の分析と説明があり、後者には、教育目的・理念の解明、教育によって伝達・継承される文化（カリキュラム）の検討、伝達方法（教授技術）の開発、教育効果の測定などの研究がある。

以上のような規定と整理に基づいて狭義の教育社会学の研究目的と研究分野を概観すると次のようになる。

○研究目的

上で述べた社会的教育事象と文化的教育事象を対象に、個人とその文化・社会・環境との相互作用（パーソナリティの形成と集団・文化・社会の関係）を説明する

○研究分野

古典的研究分野 社会的関係としての教育的関係、生

徒の社会学、教員の社会学、教育理

念の社会学、教育組織の社会学、教

育効果の社会学、etc.

組織的な問題 教育の社会的本質、教育的生活圏、

教育制度、etc.

歴史的な問題

教育の歴史と社会構造、教育イデオ

ロギーと社会構造、教育イデオロギ

ーと教育実践、etc.

(2) 広義の教育社会学(「教育と社会」学)

広義の教育社会学は、上記の伝統的な狭義の教育社会学

の成果を継承しつつも、後述するようにその枠組みを

越えた視野と方法をもっている。いわば、狭義の教育社会学

を含みつつ、さらに「教育諸学の共同によって「教育

と社会」との関連を問うていく「教育と社会」学」

(一橋大学「教育と社会」研究会編『「教育と社会」研究

』創刊の辞(一九九一)より)を標榜している。これ

をごく平明に定義するとすれば、「教育と社会の関係を

社会科学的に探求する学」であると表することができる。

これにもう少し説明的な概念規定をつけ加えるとなると、

「教育という営為が社会との関係において、どのような

現実にあるか(社会的現実・事実)をとらえ、それがど

うあるべきか(社会的理念・目的、政策)を考究しつつ、

その社会における教育の計画と改革に資する学問」とい

うことができる。

この幅広い視野と方法を必要とする「教育と社会」学

の研究対象と研究的アプローチは、おおむね次のように

整理することができる。

○研究対象

①教育の社会・心理過程

社会化過程、集団過程(学級集団、学校集団、生

徒・教師関係)、教員文化

②教育の歴史過程

教育の制度史、社会史、実践・運動史、思想史

③教育の政治・経済過程

教育と政治・経済(例、戦後の高度経済成長政策

と能力主義教育)

④教育の計画化過程

教育の目的・理念、制度・政策、教育課程、教授

II 学習過程

○教育事象への研究的アプローチ

①歴史研究のアプローチ

教育の制度史、運動史、実践史、社会史、思想史

研究

②理論研究のアプローチ

教育理論分析(教育実践・運動・制度を支え、思想を構成する理論の分析と構築)

③政策研究のアプローチ

教育政策・制度分析(教育現実に照して教育政策・制度を検討し改革の方途を探る)

④調査研究のアプローチ

教育調査(調査統計、フィールドワーク)による教育現実の把握と分析

⑤比較研究のアプローチ

比較教育学、異文化教育論

本学のこの講座は、このような幅の広い(教育と社会)学の構築をめざして講座の充実と研究の蓄積を続けている。

2 教育現実への「教育と社会」学的

アプローチ(応用編)

以上のような教育社会学についての概説をしたのち、後半では、その応用編として、今日の日本社会で起こっている教育的社会事象として「学級崩壊」と呼ばれる現象を取り上げ、この社会的現象にどのような研究のアプローチができるか(するべきか)を学生たちに考えてもらうことにした。

「学級崩壊」現象を筆者の口で伝えるよりも、ビデオで視聴したほうがリアリティがあると考え、六月一九日に「NHKスペシャル」で放映された番組「子どもの荒れとどう向き合うか」の小学校版『学級崩壊』の録画のうち、冒頭の一五分ばかりを視聴した上で、グループディスカッションをしてもらった。ちなみに、この番組の冒頭は、小学校一年生の教室で授業中に友だちの机の上を渡り歩く子どもの様子や、中学年の教室でパニックになった男の子が自分の机上の給食のはいたままの器をはね飛ばす光景が映し出されたり、ベテラン教師のクラスが崩壊状態になってとうとう退職をしてしまう教師が

出てきているとのナレーションなどが折り込まれている。わずかに十数分ほどのものであったが、受講した学生たちにとってかなりの衝撃であったようで、次のような課題(問い)を与えて、前後に座っている者たち数人でグループを作ってディスカッションをするよう指示したところ、二〇〇人近くいる教室ですぐさま話し合いが三々五々始まった。提示した課題は次のような問いである。

(問い)

「学級崩壊」とは、学級の中での集団的秩序が維持できなくなり、授業が成立しなくなっている状態をいう。

① こういう事態が日本の小・中学校に広く生じてきていることをどう理解すればいいのか(この問題は社会に何を投げかけていると考えるか)。

② また、こうした事態の改善のためには何が必要か。以上の二つの問いに答えるためには、どのような研究(「教育と社会」学)的アプローチが必要か?

① に対する研究的アプローチは?

② に対する研究的アプローチは?

なお、この問いの提示の後、話し合いの手がかりとして、ビデオに出てくる場面やナレーションのうち次のような点に焦点化して考えることを示唆しておいた。

○ 子どもたちの「荒れ」の様子をどうみるか

○ ベテラン(教職歴三〇年以上)の教師のクラスにも起こっているという事実

○ 教師の強い「指導」にもかかわらず反発する子どもたちの様子

○ 教師たちの次の言葉

「子どもたちの心の中に言葉が届いていかない」

「学校そのものが子どもたちに合わなくなってきたという」

○ 「荒れる」クラスの担任の孤立的状況と教師集団・校長のあり方

○ このような事態に直面したときの保護者と教師・学校の関係

グループディスカッションは全体の雰囲気としてかなり活発に意見が交わされている様子が伝わってきた。し

かし残念なことに、全体の時間配分にかなり無理があったため、予定していた一五分後に話し合いが佳境に入った状態で打ち切らざるを得なかった。そして残り時間はわずかに〇分弱となってしまう。このあと、いくつかのグループからのディスカッション成果の報告を受けて全体で交流するとともに、筆者の若干のまとめを予定していたのだが、二人ばかりの報告を受けた後に短しいめくりをして終わらざるをえなかった。時間配分上、完全に失敗の授業であったことを認めざるをえない。あとは、せめてグループディスカッションで課題に沿っていくつかの論点について話し合われ、お互いに啓発しあえたであろうという希望的観測に頼るしかなかった。

弁解してみるが、筆者としては次のようなまとめを予定していた。

①子どもたちの「荒れ」、「キレ」る子どもたちをどうみるか？

少子化した今日の子どもの育ち方や家庭の生活現実と親のしつけをどうみるか、子どもたちのイライラ・ストレスの社会的根源は何か、などの問題を考えるためには「今日の子どもの発達と社会」と

いう問題のシエマが成立すること。

②ベテラン教師の学級で「崩壊」現象が起こってきていることをどう理解するか？

教師が子どもの波長に合わせられなくなっている（子どもの変化に教師の子ども観が追いつかない）ことはないか。「強く指導すると子どもたちが反発する」という現象をどうみるか。教師の子ども理解、子どもとの向き合い方が問われている。こうした問いが「子どもと教師の関係」をどう作り変えていくかという問題を成立させている。

③つっぱり、立ち歩き、保健室登校、不登校などの現象をどうみるか？

これらの現象はいずれも「学習拒否」「学校秩序への異議申し立て」という側面をもつ。「学校そのものが子どもたちに合わなくなってきた」「(ピデオ)という教師たちの実感。こうした事態の広がり、授業(の形態、扱う内容、そこでの学びの質など)や学校での活動形態の問い直し(従来の学校的枠組みの問い直し)を必要としている。

④日本の学校と社会の今日の状態のなかで起こってきて

いるという側面をどうとらえるか？

日本の子どもをとりまく状況や学校のおかれた状況を社会的・歴史的文脈においてとらえ直し、この問題現象を読み解く(日本の歴史的・社会的文脈において今日の子どもと学校をとらえる)必要がある。

以上のように講義は尻切れトンボの状態で終わらざるをえず、不消化なものを残した気分です。講義を終えたのであったが、この半期の講義全体に対する感想レポートの中に、講義者(筆者)の予想を越えてかなり多くの学生たちがこの講義内容を彼らなりに引き取ってくれていることが確認できたことがせめてもの救いであった。

その証はこういうことである。この講義「社会研究の世界」全体について次のようなレポートを課した。

(レポート題)

この半期の講義であなたが思考を啓発されたり、関心をもったテーマを一つ選び、それについて考えるところを述べなさい。

(配布した提出用レポート用紙は教場試験用の解答用

紙一枚である)

提出されたレポートは全部で二六四本。そのテーマは講義に出講した一三の科目群にわたっていたが、最も多かったのが教育社会学の講義に触発されてのレポートで七四本あった。次いで多かったテーマのレポート数が四三本で、以下数本〓三〇本という分布状況であったことから考えると、この数は「よく健闘した」と少なくとも数の上では言える結果に内心ほっとした(講義は失敗であったと思っただけに)。もっとも、筆者の講義が最終日であったため、受講生たちの印象に最も強く残っていたであろうことを割り引いて考える必要がある。

数はともあれ、この講義に触発された学生たちがレポートでどのように引き取ってくれたかということの方が重要である。その全てをここで紹介することは不可能であるが、そのいくつかを紹介しながらその引き取られ方を垣間見てみたい。

七〇本あまりのレポートに目を通して、学生たちの多くが講義後半で視聴したビデオに言及しており、そこで見た「学級崩壊」の様子にかなり強い衝撃を受けたこと

がわかった(レポート数の多さの秘密はどうもここにあったようである)。また、その後のグループディスカッションではかなり多様な論点で話し合われ、それぞれに触発された様子がうかがわれたことは講義者を安心させた。それだけに、グループディスカッション後の時間がなくて、各グループで話し合った内容を全体で交流し多様な論点を確認する時間がとれなかったことが残念であると同時に、学生たちに申し訳ないことをしたと改めて反省させられた。

ちなみに、「この講義で一番よかったと思えたのは、周りの人と討議する時間が与えられたことです。大学に入って初めて受け身ではなく主体的な授業参加ができました。普段真面目なことを話したことがない友人がしっかりした意見を持っているのには驚かされました。社会学を学ぶ者として私も社会の様々な現象に目を向け、自分で考えようとする姿勢を持っていきたいです。」などといった、いかにも一年生らしい一文に出会うと、めぐっていた気分もいくぶん和らぐ。

さて、それではいくつかの感想レポートを全文で紹介してみたい。

まずは、筆者が講義中に提示した(問い)に対して自分なりの解答を試みたレポート例である。この類のレポートはかなりの数にのぼったが、次はその一部である。

私が最も興味をもったのは藤田先生の「教育社会学」の講義である。その中でもビデオ教材に対する衝撃が大きく、また、レジュメを見ると(問い)としてそれに関する問題が載っているのので、その問いに対する解答を自分なりに考え出して見ようと思う。

①「学級崩壊」という事態が日本の小・中学校に広く生じてきていることをどう理解すればいいのか。(そのための研究的アプローチは?)

(見解) 自分の小学生時代を振り返ってみると、学級崩壊など全く感じられなかったし、そういう話すらなかった。「キレる中学生」の問題も同様であるが、これらはごく最近の問題である。具体的な数字で出すと四〜五年くらいしかっていないのではないかと、と思われる。

問題の根源として最も大きいのは必ずしも「教育制度」そのものではないだろう。戦後五〇年同じような教育で日本人はきちんと育ってきた。(ただし、個性の埋没化等、もちろん問題がなかったわけではないが。)今も同じ教育を続けているはずであり、同じように育つはずである。

では、なぜ今まで通りにならないのか。それは学校教育を受ける以前までの子どもの育ち方がここ数年で大きく変わっ

たからではないか。共働きの家族が増え、子どもは愛情に欠けて育つ。兄弟も少なく部屋の中で孤独に育つ。そのような状況を生み出したのは「教育制度」ではなく「社会」そのものだ。

(解答) 「学級崩壊」「キレる中学生」は現在までたまってきた社会のひずみが一気に現われたものであり、日本社会全ての中での家庭の在り方を研究するためには何が必要か。(そのための研究的アプローチは?)

(見解) 根源から全て改善するためには日本の社会制度全てを改変しなくてはならない。政治、経済、アイデンティティを含めて、全てにおけるひずみが教育現場に表われているのだから。さらに日本の社会制度全てを改変するというのは、いろんな面(政治、経済を含む)をプラスの方向に変えるものになるだろう。しかし、いわば革命—Revolution—はそんな簡単に実現されるものではない。

ではどうするか。問題の根源は社会にあってもその解決は教育によってできるだろう。現在まで変わらずに長々と続いてきた教育を現在の社会に合うように改善すればよい。

(解答) 教育理論分析を行い、新しい教育を実践しながら模索していく。

以上が(問い)に関する自分なりの解決へのアプローチを考えたものであるが、社会は今、刻々と変化している。教育というのは社会の基盤であるが、政治・経済などのゆがみによって教育もゆがんでいる。社会全てを少しづつ、もしくは

いっぺんに変えてしまう必要があるだけに付け焼き刃の効かない難しい問題である。

(YM)

私は、教育社会学の授業で出された問いについて考えてみようと思う。

①学級崩壊が小・中学校に広く生じてきていることをどういったアプローチで見えていくべきか。

これに関しては、やはり現実をしっかりと知ることが必要である。従って、小・中学校の先生や生徒たちにアンケートをとったり、実際にそのクラスの状態を見て調査するような調査研究的アプローチが有効であると思う。また、ただ客観的に調査するだけではなく、生徒と同じ立場に立って授業を受けてみたり、逆に教師の立場に立って教壇に立ってみたりして、主観的にクラスを見てみるということもいい調査になるのではないかと思う。そのようにして、調べられるところまでできるだけ調べあげることによって、どのような状況かをよく理解できるだろう。

②学級崩壊の改善のためにはどんなアプローチが必要か。

まず上のような方法で現状をよく理解した上で、次は教育の歴史、教育制度、現在の子どもをとりまく環境、正常な学級や外国との比較などによって多方面から分析することが大切だと思う。現在の教育制度は、少しずつ改革されてきているとはいえず、戦後の経済復興のために必要な人材を生み出すという制度が未だに残っている。教師が上から生徒たちに

対し、ひたすら教えこみ、相互のやりとりのない一方的な教育によって、生徒の間にストレスがたまってしまおうということが考えられる。また、外国の学校では学級崩壊があるのか。ないのなら外国の教育制度と日本の教育制度の比較によって、改善すべき点を見出すことができるかもしれない。ある場合でも、双方の教育制度の類似点を見つけて改善点は見つづられる。他にも、医学的な面からの分析もできる。先日ニュースで小学生の高学年の知能テストの結果が以前よりも悪くなっているというのを聞いた。知能が未発達のために、自分の衝動が抑えられない子どもが増えているようである。どうしてこのような状況になってしまっているのだろうか。これには少子化によって親が子供に対して以前に比べ過保護になっているという環境の変化があげられるのではないかと思う。教育社会学の講義の時に見たビデオの例では、学級崩壊のクラスを担当が、子どもの考えていることがわからないと言っていた。また、他の教師たちから見離されてしまったという状況だった。このことは、教師と生徒、教師と教師の人間関係に問題があるのではないか。信頼というものがなくなっていると思う。また、このような人間関係は、他の所でも表れている。いじめや自殺の問題で、よく自分の悩みを聞いてくれそうな人がいないと思って一人で悩み込んでしまおうという例がある。担任がベテランであったという点を考えると、今までの教育では、もう時代遅れになってしまっていて、新しい教育が必要ということが言えると思う。学級崩壊について問題を分析していくと、このように現代社会と教育の問題は

深く結びついていることがよくわかる。学級崩壊の問題の改善をめざすには、現代社会の様々な方向からの分析を行い、教育制度だけでなく、現代社会の問題点について検討しなくてはならないと思う。

私たちが小学校や中学校にいた頃は、学級崩壊ということを知ったこともなかったし、体験したことももちろんなかった。授業で見たビデオはとても衝撃的だった。いま、自殺やいじめなどの問題も深刻になってきている。教育社会学という学問は、これからとても重要な学問になるのではないかと思う。私はまったく教育に関心はなかったが、教師になるならなにか関係なく、学んだり、考えたりしていかなくてはいけないと感じた。教育というのは、親の責任も十分にある。これから親となる私の世代にとって、今からの教育に関する問題では他人事ではすまされないことだと思う。

(KM)

次の二例は、教育社会学の存在や意義について認識を新たにしてくれた学生のレポートである(同様なレポートが散見された)。

「社会研究の世界」の一連の講義においていろいろ興味をもったことがあった。しかし、時間の経過や次の興味の対象の出現によってだんだんと記憶の中でも新しいものの印象が強い。とりわけ最後の教育社会学はその講義の中で考えて話し合う時間まで与えてもらったのでかなり強い印象がある。

社会学部の必修科目である「社会科学概論」の授業で、現在の教育問題を扱っているいろいろなビデオを見たり、本を読んだり、講義の中の話などで真剣に教育というものについて考えていたので、この講義はそういった意味で二重の興味の対象となった。

現在、教育が社会においてきわめて重要であるということ、世の中の人々は恐らく理解しているようで理解しきっていないと思う。最近、とにかく「自分の好きなように」とかいう建て前のもので、「教えられる」ということが嫌がられており、「教育」という言葉の持つ価値が下がっている面があると思う。しかし反面、少年犯罪の増加で「教育」のあり方が問われている。私が現在必要であると思うことは人々が教育についてもっと深く考え、一体何が問題でどうしてゆけばよいかを導いてくることだと思う。教育というものは、「教えられる」という作業の中で、自分の興味や才能を伸ばして、自主的に多方面の事柄に関わっていきけるすばらしいことなのである。そういったことを頭に入れておけば軽々しく「教育」自体について批判はできないはずだ。社会の中で教育のあり方を考えるということ、この教育社会学は有効なものだと思う。教育という一つの事柄を歴史、理論、政策、調査、比較といった多くの面からの研究を通して考えられるという大きな作業は、それだけの効果が必要であると思う。しかし、あくまで紹介程度の知識しかもたない自分としては、あまり教育社会学の学問的なことについては多くを語れないが、講義の中の「学級崩壊」のビデオはいろいろ考えた。今の私の少な

い知識の中で私の結論としては、あの現象は賢くなってきた子どもがその知恵を悪用して起こしたものだと思う。しかし、その背景にあるのは子どものもつ「甘え」であると思う。基本的というか、昔のほうが強い管理教育であった教育を受けてきた現在の人々は、そこまでの問題を起こしてこなかった。ということは、甘やかされている現代っ子たちがその知識を併用してあのような問題を起こしていると思う。このような考え方は教育社会学ではないであろうが、第一印象としてはそう思った。それ故に、教育社会学ならばどう考察するかというところがおもしろくなった。機会があれば教育社会学の講座をとってみたいと思っている。今後ますます多様化するであろう教育の内容を決定していくのも教育社会学の役割でもあるだろうから、この学問の進展に期待している。

(KS)

授業中みたビデオからもわかるように、今日の教育現場における「学級崩壊」現象は、深刻な問題となっている。私が小学生だったのは今から七、八年前だが、現在の小学校（あるいは中学校）でおこっている状況の半分は共感でき、半分は想像できない。プリントを飛行機にして飛ばしたりすることとはしていたが、授業中に教室を出たりすることは考えられない。別に私が小学生だった頃に現在ほど学級崩壊が叫ばれていたわけではない。つまり、「学級崩壊」とよぶに値する様々な要因は以前から存在していたが、近年あまりにも衝撃の強い行動がいくつか表面化してきたため（例えば、中学生

がナイフを常備しているなど)、すべての事象が「学級崩壊」という一言でくくられてしまったといえる。

教師、特にベテランの教師が「学級崩壊」の現状に対処しきれないでいるらしいが、そこには教師としての長年の実績が裏目にてているのではないか。長年かけて培ってきた教師としての自信が「教師は生徒より高い立場にあり、常に教える側で完璧でなくてはならない」と思わせている気がする。もちろん、教師は能力的にも人生経験的にも、生徒より多くの知識・体験を有している。しかし、教師も一人の人間であるのだから、全てが思い通りにいくとは限らない。特に子どもという心身ともに発達途上にある人間を相手にしているのだから、その難しさはなおさらである。子供たちの予期せぬ行動は、時には必要以上に積み重なった教師としての自信を一挙に打ちくだくのである。

このように、「学級崩壊」現象改善のためには、まず調査研究的アプローチを行って、現状を教師たちに客観性をもたせて伝えることが肝心である。現状の中心に置かれているだけでは、「学級崩壊」の抱える全体的問題を見抜くことができない。一方で、直接「学級崩壊」と関連のない周囲の先生を関与させるのにも、調査研究的アプローチの結果は役立つ。一人で抱えきれない問題は大量で抱えて解決していくのが当然である。それなのに教師という立場が自他ともに協力関係を拒んでいるように思えてならない。

また、歴史的研究のアプローチも事態の改善のため重要な役割を果たさだろう。なぜならば、前にも述べたとおり、「学

級崩壊」現象は、以前からずっと起こっていた問題も多く含んだものの全体的な総称であり、その問題に関しては少なくとも何らかの対処策が講じられてきたはずだからである。時代の差はあれ、子供たちの本質はたいして変化していないのだから、その対処策が直接解決策につながるにせよ、大いなるヒントとなり得るだろう。ただし、その時注意しなければならぬのは、子供たちを取り囲む環境の変化をしっかりと考慮に入れることだ。少子化や家庭内状況は以前と比較して大きく変わっている（離婚率の上昇、小さい頃（小学生低学年頃）から親に抱いてもらえなくなる子の急増など）。

教育と社会（特に家庭）との相互協力も欠かせないと思う。家庭、家族とは最小の社会的集団である。その家庭が子どもの教育の場であることが忘れられがちではないか。学校のみを教育現場であると思ひ、何か子どもについて不都合がおきると学校側の責任とする。一方で学校側も問題のある生徒の原因を家庭側に見出そうとする。このように、教育と社会が分断されてしまっているのは「教育と社会」学の機能も充分に発揮されない。教育社会学とは社会における教育のあり方を広い視点からみていくものであると感じた。

(MO)

最後に、講義に刺激を受けて教育社会学を勉強・研究してみたいと書いてくれたレポート二例を紹介しておきたい。これも同じようなレポートがあといくつかみられ

た。

私は今まで義務教育、高等教育と言われるものを受けてきた。そして、教育を受けることとそれに付随していることにほとんどの時間を費やしてきた。それが生活の中心なのだ。それだけ。教育というものは、身近であり重要である。その後の人生が決まるようなものだ。学歴の話ではない。ものの考え方、感じ方、価値観といったものが、教育の多大な影響を受けている。人格形成においても重要であるということは、人々から成る社会に対しても影響をもつ。しかし、今の教育はそういったものを任せられる状態にあるのだろうか。今だけではなく、昔も未来においても、全ての人が満足できる教育などあり得ない。常に試行錯誤の状態だろう。奥が深い問題である。おもてに現れてくるのは、非行やいじめといった問題だが、こまかいところをみればきりがない。私も、黒磯の事件や神戸の事件など、そういった時期は、それなりに教育問題について考えた。しかし、体系だった考えではなく、実際に答えがあるような問題ではないから、それ以上考えようがないといった感じだった。そこで、この教育社会学というものに興味をもった。教育問題に関してしっかりとしたアプローチ法があることを知った。解決策をすぐ探そうとするのではなく、まずは分析することが必要だと感じた。これから大学で、教育問題に対し具体的に社会学的に取り組んでみたいと思う。

(SM)

「社会研究の世界」の半期の講義を通して最も僕にとって印象的だったのは、最終日の教育社会学に関する講義だった。教育というテーマに関しては、水曜二限の導入科目、社会学概論の講義でも取り扱われたことがあるので、教育社会学の講義は、教育を社会的な視点から見つめ直す絶好の機会になったと思う。

普段、僕は教育に関する問題を考えるとき、教育に携わる人間にしか目が向かない傾向にあるが、今回の教育社会学の講義を受けて教育を一つの社会的現象として捉えるということに気づかされた。しかも、単に教育問題を社会的に把握するだけでなく、実際にそうした問題に対処する際に、社会科学の世界で用いられるアプローチの数々を応用している点は、驚きだった。こうした幅広い問題把握やアプローチの仕方を知ることが、教育が抱える問題の新たな側面や、以外な解決方法が見えてくるのかもしれないと思った。

その実例として講義の最後で「学級崩壊」現象を取り上げたビデオを見たが、この現象をいかにして捉え、いかにしてアプローチをとるかが人によって全く違ったことは非常に興味深かった(なぜ人によって違うことが分かったかという点、講師がグループごとに相談させ、その結果をマイクに向けて聞いていたからだ)。このことだけでも人間は社会的な動物であるのだと思っただけに教育という問題を社会的に分析する学問分野が必要であるのかもしれないと思った。

具体的な教育の一問題を、どうとらえるのかということ、本当は書くべきなのかもしれないが、僕はここでは、自分が

一番面白そうだと思つた教育の研究的アプローチについて考
えてみたい。講義でもらつたプリントの中にあつたアプロ
チのうち、僕は歴史的アプローチが一番印象深かつた。世界
には様々な国があり、私の知る限り教育のあり方も種々雑多
である。ではなぜ、教育は国によつてかくも異なるものでは
るのか、僕は、その理由はその国の歴史が異なるものである
からだと思う。ヨーロッパ(特に西ヨーロッパ)の国々の学
校の起こりは、キリスト教圏であることを反映して、神学を

教えることであつたし、その影響は現在も色濃く残っている
ように思える。日本の大学が入りにくく出やすいというのも、
日本の官僚主義の影響を受けているような気がするのだ。機
会があれば、教育問題の中の一つを選んで歴史研究的アプロ
ーチを行つてみたいと思う。

(HH)
(一橋大学教授)